

令和6年度 学力向上プラン

学校名 中央区立久松小学校

学校の教育目標

「強く」「正しく」「豊かに」

教育目標を達成するために学校として重点的に育成を目指す資質・能力（確かな学力向上にかかわる内容）

- ・強い意志と向上心をもち、未来を切り開いていく「自己実現能力」
- ・ものごとを正しく判断し主体的に思考を深め創造する「問題発見・解決能力」
- ・互いに尊重し思いやる「人間関係形成能力」

令和5年度「学習力サポートテスト」や令和5年度学力向上プランの検証結果、学校評価の結果等によって明らかになった課題及び要因

	児童・生徒の学力の課題	主な要因
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いを順序に気を付けて話したり書いたりする力に課題がある。 ・低学年では、促音・拗音・助詞の使い方に課題がある。 ・様々な図書に親しみ読書する習慣が身に付いていない児童がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・感染症対策により、友達に話す活動を行わない時期を経ている児童が多いこと。 ・図書室の移転や新型コロナウイルス感染症の対応の関係で、図書貸し出しの機会が減少したこと。
算数	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項を使って自身の考えを表現する場面で課題がある。 ・基礎的な知識・技能を活用して課題を解決するための能力を高めることが課題である。特にグラフを使って自分の考えの根拠となる情報を読み取ったり説明したりする力に課題がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活経験につながる数学的活動が不足している。児童が身に付けた知識・技能をどう関連付けて活用すれば問題を解くことにつながるかという見通しをもちにくい児童が多い。
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題の解決に向けて取り組んだ内容について、クラスでの共有方法に課題がある。 ・社会的事象についての具体的な資料を読み取ることができるが、課題に対して調べたこと、分かったことを生かしながら考えを整理し表現することに課題がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の課題解決に必要な情報を選択するための知識・技能が不十分な児童があり、個人差も大きいこと。 ・目的に応じて得た資料を比較・分類・関連付けながら結果や原因について考える学習場面が不足している。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・学んだことを実生活に結び付けて考えられるようにするために、生活体験を振り返って予想を立てたり、結果から分かったことと関連付けたりすることに課題がある。 ・実験・観察に使用する器具の正しい扱い方やそうした器具を活用することで何があきらかになるのかなど、基本的な活用方法に対する理解が不十分な点が課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・結果を比較・分類したり違いについて推測したりする場面での意見交流する機会が不足している。 ・課題解決に向けての学習の流れを、子供自身が意識して取り組めていないこと。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ・高学年は読み・書きの能力に個人差がある。 ・学習したことを生かし、自己表現する力や積極的に課題を解決していくなど、主体的に学習に取り組む態度を育てることが課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・読み・書きの時間が確保できなかった。 ・発話や発生を行う活動やペア・グループでのアクティビティが制限され、十分な言語活動を行うことができなかったこと。
体育	<ul style="list-style-type: none"> ・領域によって、児童の技能差が顕著になる。特に器械運動の領域では、日常的な経験の少なさや、コロナ禍での運動不足の傾向が強く表れていた。 ・筋力や巧緻性・柔軟性、また固定器具等を使った運動の能力について、個人差が大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童数増加のため、体育学習や様々な運動の機会に制限があったこと。 ・体育の授業でしか体を動かすことのない児童が増加していること。 ・外遊びの量や質に制限が生じていること。

学力向上に向けた視点		年度末までの目標及び指標
① 各教科	国語	<ul style="list-style-type: none"> ・「令和6年度学習力サポートテスト」において教科全体で区平均正答率を上回るようにする。 ・日常生活に必要な国語の知識や技能を育成する。 ・筋道を立てて考える力や感じたこと、想像したことを豊かに伝え合う力を育てる。 ・我が国の言語文化に関する知識や技能を育成する。
	算数	<ul style="list-style-type: none"> ・「令和6年度学習力サポートテスト」において教科全体で区平均正答率を上回るようにする。 ・課題に対して筋道を立てて考察する力を育てる。 ・「データの活用」の領域において、ICTを活用して他教科等との関連を図りながら、実際の活用場面と関連付けた指導を行う。
	社会	<ul style="list-style-type: none"> ・「令和6年度学習力サポートテスト」において教科全体で区平均正答率を上回るようにする。 ・社会的事象において主体的に課題を追究する力を育てる。 ・4年「工場の仕事」や6年「自動車をつくる工業」では、体験的な学習を意図的・計画的に取り入れ、知識や技能をより確かなものにする。
	理科	<ul style="list-style-type: none"> ・「令和6年度学習力サポートテスト」において教科全体で区平均正答率を上回るようにする。 ・「令和5年度学習力サポートテスト」において、区内平均正答率と比べた数値が、昨年度より第6学年で0.9ポイント下回った。観点別にみると「知識・技能」の項目が低い。単元で見ると「魚のたんじょう」「人のたんじょう」等、生物領域の値が低い。年度末まで、ICT機器を活用し重点的に復習を行う。
	英語	<ul style="list-style-type: none"> ・「令和6年度学習力サポートテスト」において教科全体で区平均正答率を上回るようにする。 ・学習したことを生かして、主体的に自己表現しようとする態度を養う。 ・英語の単語や文を書く機会を増やし、慣れ親しませることで知識や技能を育成する。
	体育	<ul style="list-style-type: none"> ・特性に応じた運動の仕方や健康・安全について理解し、基本的な動きや技能を身に付けようとする。 ・運動や健康について課題を見付け、解決に向けて思考し、判断したり考えを伝え合ったりする力を育てる。 ・各運動領域において、持久力につながる運動を帯で設定し、体力向上を図る。 ・保健領域において、体力向上の重要性を実生活と関連付けて指導し、より運動に進んで取り組む態度を養う。
② 授業改善	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の思考力・判断力・表現力をバランスよく育成する。 ・児童の「学校評価アンケート」で「学習が分かる」と回答する児童9割以上を目指す。 ・保護者の「学校評価アンケート」で「分かりやすく工夫された授業をしている」ことに概ね満足と回答する保護者9割以上を目指す。 	
③ 家庭との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・地域や家庭との連携を深め、児童の学力向上に向けた教育活動への理解と協力のもと、より高い学習成果を目指す。 ・「学校評価アンケート」で「家庭学習をほぼ毎日する」と回答する児童、保護者9割以上を目指す。 ・保護者の「学校評価アンケート」で「児童の学力を観点別評価で適切に行っている」と回答する保護者9割以上を目指す。 	
④ 体力向上	<ul style="list-style-type: none"> ・体力調査で児童が個々の記録を上回ることができるようにする。特に、握力・投能力・跳能力の向上を目指す。 ・保護者の「学校評価アンケート」で「児童の健康・体力の増進に努めている」ことに概ね満足と回答する保護者8割以上を目指す。 ・「令和5年度 東京都児童・生徒体力・運動能力、生活・運動習慣等調査」において、握力の数値が、男女ともに全学年にわたり、全国平均に比べ数値が低かった。また、持久力の数値が、男女ともに中学年以降、全国平均に比べ数値が低かった。特にこの2点に関しては、日常的に運動に取り組める環境づくりや、授業内で意識的に行うなどの改善を行う。 	

【目標達成のための具体的な取組内容】

① 各教科	
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・読み取った内容から自らの考えをもたせる指導を充実させる。 ・小テストの実施、辞書の活用、視写や読書活動、音読を通して、かな文字や漢字・ローマ字の確実な習得・定着を図るとともに、語彙力や文法力、読解力、文章力を高める。 ・話したり聞いたりするときのポイントやルールを分かりやすく提示する。 ・学習のねらいや発達の段階に応じて、小集団活動による活動を効果的に取り入れる。 ・学年に応じて、叙述から中心となる語や文を捉える、段落ごとの要点をおさえる、話の内容や文章全体の構成を考えながら目的や意図を理解するなどの指導を積み重ねる。 ・「取材→構成→記述→推敲→交流」の学習過程で、児童の学習状況に応じた具体的な指導を行い、自分の考えを分かりやすく書き表す力を育てる。 ・明確で必要感のある学習課題や学習計画を設定する。
算数	<ul style="list-style-type: none"> ・どのようにしてその解決方法を考えたのか、具体物を用いたり、友達に説明したりする場面を意図的に設けることで、自身の考えを明確にするよう指導する。 ・2年生以上で習熟度別少人数指導を導入し、個に応じた指導を継続的に行う。 ・タブレット端末を積極的に活用し、基礎的な知識・技能の確実な定着を目指す。 ・低学年では、具体物やブロックを用いた活動を通して、具体的操作と言葉を結び付け、体験的に理解できるようにする。 ・高学年では、グラフから読み取れることやそこから考えられることを話し合ったり、自分の考えの根拠を明らかにしながら説明したりする学習を取り入れる。 ・児童が日常生活との関連から課題を見付けられるような問題提示の仕方を工夫する。 ・学習の過程で小集団活動を適切に取り入れ、様々な考えに触れられるようにする。 ・児童が考えた経緯を自ら振り返ることができるようなノートの書き方を工夫する。 ・単元を通して基礎的、基本的な練習問題などの既習事項を授業の初めや終わりに短時間で確認する。
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の興味関心を引き出す導入の仕方を工夫する。 ・主体的に課題を追究することができるような学習活動を設定し、問題解決の過程を重視する。 ・地図やグラフなどの資料の見方を指導する。タブレット端末などを活用して資料を収集し、自分が調べたい内容と資料との関連性について話し合ったり考えをまとめたりする活動を積み重ねる。 ・地域の教育力を活用して、児童自身が課題解決に必要な見学や調査等の機会を設定する。 ・学習の課題は何か、そこから自分自身の予想を立てさせ、調べ学習をする目的を明確にして、学習を進める。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・問題解決の過程を重視した授業を展開し、科学的な思考の仕方を指導する。 ・観察・実験記録の書き方や考察のまとめ方などを具体的に指導する。 ・校外学習や移動教室、ピオトープでの自然観察の機会をもち、植物の育ち方に対する理解を体験的に深める。 ・様々な条件や場合に応じた実験・観察を繰り返し、体験を積み重ねることによって、調べたり確かめたりすることの有効性を理解できるようにする。 ・デジタル教材等を活用し、実感を伴った理解ができるようにする。 ・学んだことを実生活に結び付けて考えさせるようにする。 ・実験用具は、一人に一つ、あるいは少人数で一つなど、実際に体験する活動を毎時間設ける。自然条件などの関係で、教室内観察が難しい場合は、ICT教材を活用し学習をさせる。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ・単元のターゲットセンテンスだけでなく、既習事項をもとに、さらに表現の工夫ができるように教室内の掲示等工夫をして、いつでも活用できるようにする。 ・より身近な場面設定をして言語活動を行い、学習したことをアウトプットする機会を増やしていく。 ・担任や英語専科教諭とALTが連携し、興味・関心をもって取り組む学習活動の工夫をする。 ・音声および映像教材、タブレット端末等にインストールされているデジタル教科書を積極的に活用する。 ・児童相互の関わりを大切に学習活動を取り入れる。高学年では、ペアでの small talk を継続して行うなど、学習したことをアウトプットする活動を取り入れる。 ・自分たちの身の回りにある異文化に、より興味をもたせるようにする。 ・友達同士のコミュニケーションを授業の主体にしつつ、そこに至るまで文章を考えたり、書いたりする準備の時間を多く設ける。
体育	<ul style="list-style-type: none"> ・学び合いの場を重視し、効果的に小集団活動を取り入れる。学習カードを活用し、自分の学習の成果や課題に気付かせたり、次のめあてをもたせたりする。 ・児童の活動の様子や学習カードの記述から学習状況を見取り、適切な助言をする。 ・体育朝会でマイスクールスポーツに取り組んだり、柔軟性を高める運動を紹介したりする。 ・授業の中で基礎的な体力（握力・投能力・跳能力等）を高めるための活動を意図的・継続的に取り入れる。

② 授業改善

取組Ⅰ	・学校行事や各教科と指導内容の関連性、教科等の横断的な指導など、教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントの充実を図り、授業を通して効果的な指導に役立てる。
取組Ⅱ	・小集団活動や、ICT機器については、積極的活用を心がけて取り組む。また、より効果的な活用場がないか検討していく。

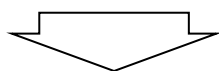
③ 家庭との連携

取組Ⅰ	・ICT機器を有効に活用し、家庭学習の充実を図るとともに必要に応じてオンラインによる個別指導や個別の授業を実施していく。
取組Ⅱ	・個人面談や「久松すくすくプラン」を活用しながら、学校と家庭が児童に身に付けさせたい力や伸ばしていきたい力を明らかにし、個別指導に役立てる。

④ 体力向上

取組Ⅰ	・児童が運動の技能を高め、運動を通じてできる喜びを実感させるために、水泳サポート教室やマット・跳び箱サポート教室を実施する。また、運動技能が高まった児童を称賛し、学年や学級で紹介する。(運動委員会の縄跳び活動の奨励と支援)
取組Ⅱ	・児童の体力の向上を図るために、体育学習の指導方法やマイスクールスポーツ(水泳・縄跳び)の取り組み方を改善し、児童が意欲的・継続的に運動できる方法と環境を整える。 ・休み時間の鉄棒を使った遊びの例などを作成し、運動の日常化を促進する。

【取組結果の検証】



学力向上に向けた視点		取組の成果	取組の課題及び解決策
①学力基盤	国語	<ul style="list-style-type: none"> カリキュラム・マネジメントの視点を基に、各領域の授業において、思考力を高める授業づくりを継続できた。 校内研究の重点項目である小集団活動の充実を図り、対話的な学びに迫れた。 特別活動や社会科、理科などの学習を活用し、「取材→構成→記述→推敲→交流」の学習過程で物事を相手に伝える機会を多くもたせた。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校図書館を更に活用し、読書に関わる活動を充実させる必要がある。そのために、国語科を中心に、司書教諭と連携を図って学習活動を展開する。 語彙の定着を確実に行う。そのために、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことの学習を相互につなげ、言語活動を各領域で充実させるようにする。
	算数	<ul style="list-style-type: none"> 具体物の操作を積極的に取り入れ、自身の考えを整理し、説明することができた。 タブレット端末を活用することで児童の考えを広め、様々な考えを小集団の話し合いで深めることができた。 日常生活に関連した問題の工夫で、児童の課題を見つけ、解決する力を育てた。 	<ul style="list-style-type: none"> 具体物を用いて考えを試行する学習活動を展開し、体験的に理解する活動をしていく。 自身の考えを広め、深めるためには、説明する活動が有効なため、引き続き小集団での説明する場面を意図的に設けていく。
	社会	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に課題を追究することができるような学習活動を設定することで、学習資料やICT機器を有効的に活用し、自身の考えを表現する力が身に付いた。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習課題の解決に向けて取り組んだ内容について、クラスでの共有方法に課題があった。どのような方法で共有すると、児童の学習がより深まるのか、教員間でも様々な方法を模索していく。
	理科	<ul style="list-style-type: none"> 観察・実験記録の書き方や考察のまとめ方などを具体的に指導し、予想と比較したり関連付けたりしながら考察をする児童が増えた。 自然条件などの関係で、教室内観察が難しい場合は、ICT教材を活用し、実感を伴った理解ができる児童が増えた。 	<ul style="list-style-type: none"> 学んだことを実生活に結び付けて考えられるようにするために、生活体験を振り返って予想を立てたり、結果から分かったことと関連付けたりするように指導する。 実験・観察を繰り返し、調べたり確かめたりすることの有効性を理解して、新たな課題を発見する力を高められるようにしていく。
	英語	<ul style="list-style-type: none"> 英単語やアルファベットの音声を聞く際に、デジタル教科書の音声やチャンツを使用し、聞く機会を増やすことができた。 校内研究の目標を踏まえ、カリキュラム・マネジメントの視点から単元構成を考え、児童が主体的に取り組めるよう授業設計することができた。 児童が興味・関心をもちやすい題材を設定し、単元を計画することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 英単語やアルファベットの音声を聞く機会を増やしつつ、それらを活用する機会も十分に確保していく。 既習事項をもとに、さらに児童が主体的に取り組めるよう、ALTや学級担任と協力して授業の題材や目標を設定していく。
	体育	<ul style="list-style-type: none"> 学習カードを活用し、自分の学習の成果や課題に気付かせたり、次のめあてをもたせたりすることで、児童が自らの学習課題を明確に捉え、その解決に向けて運動に取り組むことができた。 ICT機器を活用することで、自分の課題を適切に捉えたり、友達とアドバイスを合ったりする姿が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> 領域によって、児童の技能差が顕著になる。特に器械運動の領域では、日常的な経験の少なさや、活動場所の制限、コロナ禍での運動不足の傾向が強く表れていた。学校として、体育の授業中に帯で取り組む運動例などを考えて授業に取り入れていく。

<p>③ 授業改善</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小集団活動を通じて様々な視点からの意見を知り、自身の考えを深めることにつながった。また、意見交流のためにICT機器を効果的に使うことで、進んで関わろうとする態度が育った。 ・児童アンケートで「学習がよく分かる・分かる」と回答した児童が96%いた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小集団活動やICT機器について、効果的活用方法を模索しながら取り組んだ。今後は、より効果的な活用場面や方法を見極め、児童の思考に沿った活用方法を精査していく必要がある。 ・教科担任制をより積極的に活用し、学年全体の児童理解を進めるとともに、自身の指導力向上につなげる。
<p>④ 家庭との連携</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器を様々な場面で活用できた。欠席した児童はオンラインによる指導など、学びの継続性を保障したり個別指導に役立てたりした。「分かりやすく工夫した授業をしている」と回答した保護者が87%いた。また、オンライン配信による授業を公開し、児童の学習の様子を伝えることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後は、学校での学びと家庭学習とを円滑につなげるために、ICT機器の効果的な活用方法について検討する。学習履歴の蓄積を計画的に行い、学習の進捗について保護者にも分かりやすいよう共有し、連携をしながら進めていく。
<p>④ 体力向上</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・外部講師の活用や、アスリートによる講演会や実技指導で、体力向上に関する気運の醸成を図った。 ・運動委員会で体力向上週間（的当て・リズム縄跳び・ポッチャ体験）を児童自ら運営し、多くの児童が運動に親しんだ。 ・体育の授業で学んだことを、休み時間の遊びにも取り入れている場面が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常的に運動している児童は76%いた。学校での取り組みが、休み時間だけでなく、放課後や休日の運動習慣にもつながるよう、保護者も交えた取り組みをしていく必要がある。